『20歳のときに知っておきたかったこと スタンフォード大学集中講義』



著者：ティナ・シーリグ著　高遠裕子訳
出版社：阪急コミュニケーションズ
発行：2010年4月16日
価格：1,470円

「わたしたちの最高の作品であるマッキントッシュを発表して一年後、三〇歳の誕生日を迎えた矢先に、わたしはクビになってしまいました。自分が起こした会社をどうしてクビになるのでしょうか?・・・・・大人になってからすべてを賭けて打ち込んできたものを失ったわけですから、それは最悪でした。」

この言葉は、今、世界中で売れに売れまくっているiPhoneやiPadを作っているアップル社のCEOであるスティーブ・ジョブスが、2005年のスタンフォード大学の卒業式で述べた言葉です。

そしてこの言葉には続きがあります。

「そのときはわかりませんでしたが、後からみると、アップルを追い出されたことは、私の人生で最良の出来事でした。・・・・何事にも前ほど自信は持てなくなりましたが、それによって自由になり、人生でもっともクリエイティブな時期に入ることができたのです。」

この言葉が示すようにアップル社をクビになったジョブスは、NeXTという会社とピクサーという映画会社を立ち上げ、「トイ・ストーリー」などの映画をヒットさせます。その後、NeXTがアップルに買収されると、彼は再びアップルの重役となってゆくのです。

この本はスティーブ・ジョブスのような物語 ―多くの失敗とそこから大きな成功へと結びつくような― が多く登場します。どれも読者をワクワクさせるような物語が多く登場しますが、著者である彼女が言いたかったことは成功へのジャンプの話ではありません。

「わたしが伝えたかったのは、常識を疑う許可、世の中を新鮮な目で見る許可、実験する許可、失敗する許可、自分自身で進路を描く許可、そして自分自身の限界を試す許可を、あなた自身に与えてください、ということなのですから。じつはこれこそ、わたしが二〇歳のとき、あるいは三〇、四〇の時に知っていたかったことであり、

五〇歳のいまも、たえず思い出さなくてはいけないことなのです。」

そうです。“自分の限界は自分が作っている”ということを彼女はこの本で伝えたかったのです。そして自分を変えることに「遅い」ということがないことも・・・・。

大阪商業大学 総合経営学部 経営学科 教授
起業教育委員会 副委員長 粂野博行